

潟語り(二十)

文・小西 一二
絵・小西 由紀子

「もんぱ漁」のいじり

大崎地区の三浦了四郎さん(六九)は、潟の漁師だった父親の手伝いで小学校五年生の頃から出漁。潟でさまざまな漁をしてきた方です。今回は網を使わない定置網の一種、「もんぱ漁」についてお聞きしました。

「もんぱ」を建てる場所は入札で決めた

「もんぱ」には春もんぱと秋もんぱがあって、春もんぱは岸に近い水深一メートル前後の浅いところ。秋もんぱは二〜三メートルの深いところに建てたもんだ。

「もんぱ」にはヨシを編んだすだれをいっぺ使うども、これはヨシを刈ってきて羽立の人たちに編んでもらった。すだれを支えるくいは松でねばだめだ。杉を使えば浮いでくるがらな。松は近くの林から切り出し、半年位も潟の中に沈めて置く。そうすれば手でこすただけで皮がむけたもんだものな。

「もんぱ」をやる漁師はいっぺいいだもんだがら、場所は入札だ。場所が決まれば「もんぱ」を建てるども、これも大変な仕事だった。当時は個人の船着き場があちこちにあつて、道は人ひとりやと通れる幅しかねがった。だから、くいもすだれも船まで担いで運ぶ。それらを積んだ船を現場まで漕いで行く。動力などねがったからな。「もんぱ」一つを建てるのに四〜五人で一日はかかった。漁師

一人で四つ位の「もんぱ」を持ってたもんだ。
俺の家は上の兄が二人とも兵隊に行ったもんだがら、小学五年の頃から手伝った。朝の二時には親父と一緒に潟に出て、胴に入った魚をタモ網ですくって五時半頃までに帰ってくる。船着き場では、魚の行商人などがいっぺ待っていてだもんだ。今だったら小学五年生を朝の二時から働かせれば先生方、大騒ぎだすべ(笑)。でも当時はそれが当たり前。みんな必死になって働いたもんだ。

